

クローチエの史的唯物論解釈

中 川 政 樹

一、はじめに

「時代の精神」を偉大な思想家に求めることが可能であるとした場合、ベネデット・クローチエ (Benedetto Croce, 1866—1952) ほど、それに適う人物は稀であろう。ヒューズは、一九世紀末の「実証主義への反逆」を論ずる中で、つぎのように述べている。「イタリアにおいては、一八九〇年代から第一次世界大戦にかけての時期は、文学、哲学上のルネッサンスとなった。そして、これは、驚くべきことだが、たった一人の人物のなせる業であった。」⁽¹⁾ まことに「ヨーロッパの主要国の文化をただ一人の人間がこんなに完全に支配したのは、ゲーテ以来なかったことである。」⁽²⁾ このことを、のちにクローチエの最大の批判者となったイタリア共産党創立者の一人、グラムシ (Antonio Gramsci) は、当事者の一人として「私や……この時代の他の多くの知識人たちは、イタリアでクローチエによって推進された道徳的・知的改革に、全面的にであれ部分的にであれ参加したのであった」⁽³⁾ と証言している。

クローチエが、イタリアにおける最大の知識人の一人としての地位

を最初に獲得したのは、マルクス主義の研究によってであった。当時、かれは、精神の科学としての哲学体系をいまだ確立していなかったが、この研究はかれの知的形成の背景となった。⁽⁴⁾ クローチエは、後年「イタリアにおいて理論的マルクス主義はいかにして生れ、いかにして死滅したか、一八九五—一九〇〇年」(Come nacque e come morì il marxismo teorico in Italia (1895—1900)) という回顧録を著わした。⁽⁵⁾ かれは、マルクス主義の研究に、この論稿に示された期間、すなわち一八九五年から没頭し、いくつかの重要な著作を発表したのち、一九〇〇年にはそれを止めてしまった。以後、その時々断片的な小論を発表してはいるが、この期間以外にマルクス主義に関する問題が、かれの研究の主題となることは絶えてなかった。それだけに、この回顧録の表題は、かれがイタリアにおけるマルクス主義研究の第一人者であったとの自負を示すものとみることができよう。しかし、この期間に発表された論文⁽⁶⁾ を検討してみると、クローチエのマルクス主義に関する理論の主要な部分は、すでに一八九六年から一八九七年にかけてほぼ確立されていたと考えられる。かれが、回顧録において、研究を「二年以上にわたって」続けたと述べていることは、この判断が妥当

であることの証左といえよう。

かれのマルクス主義研究は、意図することなく、のちに精神の科学としての哲学体系を構築するための通過点となった。クローチエは、「ほとんど偶然のことからマルクスに出会い、かれのもとにしばらく留まらざるを得ず、鋭い知性を示すことがらを四つ五つ述べ、それからもっと恒久的な問題へと移っていった⁽⁸⁾」のである。マルクス主義研究は、かれのこの時期の知的作業に新しい観点を与えたが、とりわけ、史的唯物論の研究は、歴史的博識と文芸とに片寄りがちであったかれの歴史研究に、一定の方向性を与える矯正剤となった。史的唯物論研究は、一八九六年から九七年にかけてのクローチエのマルクス主義研究の第一の主題と考えることができる。それゆえ、本稿は、この期間のかれのマルクス主義研究とりわけ史的唯物論解釈に焦点を当て、その論理構造を明らかにしようとするものである。

その際、クローチエの研究の外的条件を無視することはできないであろう。なぜなら、クローチエをして、当時のマルクス主義の有数の理論家とした状況こそ、研究の推進力であったからである。すなわち、それはヨーロッパにおけるマルクス主義の修正主義論争である。しかし、この論争の展開過程を仔細に把握して、クローチエの論理構造を明らかにしてゆくことは、論争の複雑な展開と本稿の主題の限定性のゆえに、よくしうるところではない。したがって、それらを外的条件として把握して、簡単に指摘するにとどめておくこととする。

(1) H. S. Hughes, *Coscienza e società*, tr. da C. Costantini, 3ed., Torino, 1967, p. 68. 生松敬三・荒川幾男訳、『意識と社会』、みすず

書房、一九七〇年、四四頁。

- (2) H. S. Hughes, *ibid.*, p. 199. 生松・荒川訳、前掲書、一三八頁。
- (3) A. Gramsci, *Il materialismo storico e la filosofia di Benedetto Croce*, Torino, 1966, p. 132.
- (4) E. Jacobitti, *Labriola, Croce, and Italian Marxism (1895-1910)*, in *Journal of the History of Ideas*, vol. XXXVI, n. 2, 1975, p. 298.
- (5) B. Croce, *Come nacque e come morì il marxismo teorico in Italia (1895-1900)*, (以下「Come」と略記) in *Materialismo storico ed economia marxistica*, 10 ed., Bari, 1961, (以下「Materialismo」と略記)。この論文については、林登良夫、「クローチエ・マルクス主義の歴史」、『イタリア(一八九五年—一九〇〇年)においてマルクス主義はいかにして生れ、いかにして消滅したか』について、——資料(全文訳)と研究——、「(1)『下関商経論集』、第二巻一号、一九七七年、六五頁—九〇頁。(2)『同』、第二二巻三号、一九七八年、四五頁—六七頁。(3)『下関市立大学論集』、第二二巻三号、一九七九年、九一頁—一二二頁がある。
- (6) クローチエのマルクス主義に関する著作については、「フィノッキアーロ」の論文に目録が附されている。cf. M. Finocchiaro, *Croce and Marxism: A Bibliographical prolegomenon*, in *Rivista di Studi Crociani*, a XVII, fasc. II, 1980, pp. 157-163.
- (7) B. Croce, *Come*, in *Materialismo*, p. 282.
- (8) H. S. Hughes, *op. cit.*, p. 77.

二、修正主義論争とクローチエ

一九世紀後半の知的領域を支配した実証主義は、その内容において必ずしも、コントやスペンサーの名を冠して呼ばれる一定の原理

体系を意味するものとはいえない。むしろ、それは、科学主義、自然主義、機械主義さらには唯物論などと置き換え可能な一つの知的傾向と考えることができる。このように理解される実証主義は、一九世紀末には強力な批判に遭遇することとなった。ドイツにおける新カント主義、フランスで非合理主義的直観主義、イタリアでは理想主義さらにアングロ・サクソン諸国でのプラグマティズムなどによる実証主義への逆転が、それである。当時しだいに普及してきたマルクス主義は、実証主義の変種とみられていたが、その学説に対してもこれらの立場から綿密な批判的検討が加えられることとなった。それは外部からの批判にとどまらなかった。それまでひそかに潜行していたマルクス主義陣営内からの批判は、一八九五年のエンゲルスの死によって、絶対的権威を有する裁定者を喪失して、一気に荒野の野火となって広がっていった。政治の局面では、周知のようにドイツ社会民主党においてベルンシュタインによって口火がきられた修正派と正統派とによるいわゆる修正主義論争として顕現した。この論争は、ヨーロッパにおけるドイツ社会民主党の指導的立場からして、各国の社会主義諸政党の内外で、その規模や内容の深化の度合をそれぞれ異にしながらも、受けつがれることとなった。こうして、一八九〇年代はヨーロッパの社会主義とりわけマルクス主義の大変動期となり、各国の出版物に「マルクス主義の危機」という用語が氾濫したのである。

イタリアにおいては、社会党の指導者トゥラーティ(Filippo Turati)が、ベルンシュタインの立場に位置しており、かれとかれの主宰する『社会評論』《*Critica sociale*》紙が改良主義的傾向を代表するものであった。正統派の側には、当時ローマ大学でマルクス主義を講義して

クローチエの史的唯物論解釈(中川)

いたラブリオーラ(Antonio Labriola)が論陣を張っていた。だが、イタリアにおける論争は、トゥラーティとラブリオーラとの間で展開されたのではない。それは、ラブリオーラとクローチエ、ジェンティール(Giovanni Gentile)およびソレル(Georges Sorel)との間でおこなわれたのであった。この顔ぶれがわれわれに教えることは、まず第一に、論争への非マルクス主義者の参加である。⁽¹⁾この時期を含めて短期間マルクス主義者であったラブリオーラを除いて、クローチエとジェンティールはマルクス主義者ではなく、フランスから論争に関与したソレルも、多くの留保をつけたうえでマルクス主義者であったとはいえず、革命的サンディカリズムへの傾斜を強めていた。第二に、論争者がいずれも実践的政治経験とは無縁であり、社会主義運動への実践面での影響力に乏しかった。このため、論争はドイツ社会民主党におけるように活発な政治的实践に根ざして、理論と実践との適合および政治戦略の検討といった観点から、マルクス主義の修正を争うものとはいえず、より抽象的で理論的な側面に限定された。さらに、ラブリオーラ、クローチエそしてジェンティールらにヘーゲルの陶冶があったということによって、論争は著しい哲学的屈折を蒙った。⁽²⁾このような事情は、イタリアにおける論争をしてドイツのそれと相互的影響を強くもちながらも、質的にきわめて異った様相を示すものにした。クローチエは、九〇年代の「修正主義的傾向の知的リーダー」として、この論争に加わったのである。⁽⁴⁾

ただし、論争者をラブリオーラ対クローチエ、ジェンティール、ソレルという図式で対置させることが、その大枠において妥当であるとしても、クローチエ、ジェンティールおよびソレルが一致した立場に

あったのではなく、三者の間にはその主張に明確な相違が認められる。三者の間での相互的批判が、論争に加わることによって、論争過程はきわめて複雑なものとなっている。その過程をフォローして各々の論理を明らかにしてゆくことは、本稿の課題とするところではない。それゆえ、われわれは、さし当ってこの論争をクローチエのマルクス主義とりわけ史的唯物論研究の背景として指摘するにとどめることとしたい。⁽⁵⁾

マルクス主義研究を開始する以前、クローチエは文芸と歴史の博識に没頭していたが、歴史解釈の規矩となる理論の必要性を感じていた。かれは、知識を人間精神との関係において把握することによってそれが可能と考え、ヴィーコ (Giambattista Vico) やデ・サンクティス (De Sanctis) の著作にその典拠を求めていた。一八九三年、クローチエは歴史に関する初めての理論的著作を発表した。すなわち、「長いためらいと一連の暫定的な解決のち、一八九三年の二月かあるいは三月、一日中考え抜いて、私は『芸術の一般概念に包摂される歴史』*«La storia ridotta sotto il concetto generale dell'arte»*と題する論文を一晚で走り書きました。これは私にとって自己啓示のようなものであった。それは、私に普通は混乱しているいくつかの概念と、そして、多くの誤った方向の論理的根源を明確にみる喜びを与えたのみならず、私の心にあったものがあふれ出たように容易に熱意をもつて書けたことが、私にとって驚きであった……」⁽⁶⁾この論文における主題は、歴史は科学であるか芸術であるかという問題であった。彼の結論はきわめて直截である。「歴史は諸事実を語るといふただ一つの任務をもつのみ」⁽⁷⁾であり、「現実におこったことをその表現対象とする一種の芸術

的産物」⁽⁸⁾である。「歴史叙述は概念を練り上げるものではなく、個々の出来事をその具体性において再現するものである。その理由によって、われわれは歴史に科学としての性格を否認した。したがって……もし歴史が科学でないとするならば、芸術でなければならぬと結論することは……容易なことである」⁽⁹⁾これらの発言からあきらかなように、クローチエは、普通的法則を探究する科学の領域に歴史を分類することを拒否したのである。それは、歴史を芸術に包摂させることによって、自然科学的論理によって処断されない文芸や歴史といった文化科学の領域を確保しようとしたのであった。

しかし、このような結論は、クローチエにとって一時的な解決にすぎなかった。なぜなら、歴史理解の規矩は、この結論からは得られないことが明白だからである。クローチエは、マルクス主義との出会いによって、それを探索してゆくこととなった。

(1) C. Vigna (a cura di), *Le origini del marxismo teorico in Italia*, Roma, 1977, pp. 19-21.

(2) C. Vigna, *ibid.*, p. 20.

(3) A. Gramsci, *II op. cit.*, p. 176.

(4) M. Franchini, *Croce e il marxismo italiano*, in *«Rivista di Studi Crociani»* a XV, fasc. III-IV, 1978, p. 238. A. Gramsci, *op. cit.*, E. Santarelli, *La revisione del marxismo in Italia*, 2^{ed.}, Milano, 1977, pp. 70-71.

(5) 論争の過程をフォローしながら、クローチエその他の論争者の理論をより扱ったものとして、前出の C. Vigna (a cura di), *Le origini del marxismo teorico in Italia* のほか、大著 E. Agazzi, *Il giov-*

ane Croce e il marxismo, Torino, 1962. かもろ。

- (9) B. Croce, *Contributo alla critica di me stesso*, in *Etica e Politica*, Bari, edizione economica, 1967, p. 327.
- (7) B. Croce, *La storia ridotta sotto il concetto generale dell'arte*, in *Primi saggi*; Bari, 2ed. 1927, p. 18.
- (8) B. Croce, *ibid.*, p. 36.
- (6) B. Croce, *ibid.*, p. 24.

三、史的唯物論の解釈

一八九五年四月二十七日、クローチェは、ローマ大学在学時の師ラブリオーラから一通の手紙を受けとった。この手紙の中で、ラブリオーラは、パリで『社会生成』《*Demerit social*》という雑誌が発行されたことを知らせ、クローチェに二つの依頼をした。一つは、この雑誌の購読者になって欲しいということ、もう一つは、かれがこの雑誌に発表することを予定している論文の草稿に目を通し、それを一つの小冊子にすべきかどうかについて意見を求めたものであった。⁽¹⁾クローチェは、ラブリオーラがすでに数年前から史的唯物論を講義していることを知っていたが、ナポリに任んでいたため聴講を断念せざるをえなかったのであった。それゆえ、かれは草稿の到達を大いに期待して待った。送られてきた草稿は、「共産党宣言を記念して」(*In memoria del Manifesto dei Comunisti*) という表題のものであった。かれは草稿を繰返し読み、新しい「展望」や「概念」によって満たされるのを感じた。そして、「熱望した精神に対して開かれた啓示の感情」に捉われて、かれはマルクス主義の研究に着手した。⁽²⁾のちに、クローチェは、この

手紙の日付けをもって、イタリヤにおける理論的マルクス主義誕生の日であると記したのであった。⁽³⁾こうして、ラブリオーラの著作に刺激を受けて、クローチェはマルクス主義研究を開始したが、それは前述のように、歴史解釈の諸観念を明確にするという問題意識からのものであった。したがって、かれの関心は、マルクス主義理論の中でも史的唯物論に注がれた。

一八九六年、ラブリオーラは、「史的唯物論について——予備的説明」(*Del materialismo storico, Dillucidazioni preliminari*) という論文を発表した。この中で、史的唯物論は、事実の必然性を明らかにする「新しい決定的な歴史哲学」と把握されていた。これに対して同年クローチェは、「歴史の唯物論的概念について」(*Sulla concezione materialistica della storia*) を著わした。⁽⁴⁾この論文は、ラブリオーラの著作を論評する形で、史的唯物論に関するかれの見解を開陳したものである。クローチェは、ラブリオーラの見解に對立するかれの見解を、ラブリオーラの主張の中にすでに含まれていたもののように注意深く表現しているが、違いは明白である。

クローチェは、「史的唯物論の冷静な解剖者」⁽⁵⁾として、まず科学理論と資料との峻別から出発する。科学理論は、法則を探究する際、概念化の作業を欠落させることはできない。この概念化という点に照らして判断すれば、史的唯物論は、歴史解釈の科学としての歴史哲学といえるであろうか。「歴史哲学の可能性は、歴史の流れを一つ概念に還元することが可能であるということを前提としている」⁽⁶⁾。歴史に現われる諸要因を概念にまとめ上げることが可能であるが、具体的諸事実を概念化することは不可能である。たとえその概念化がなされた

としても、歴史の本来の内容である具体的諸事実を空虚なものにしてしまふ。古来より歴史哲学が、神の観念や摂理の観念でもって、諸事実の中に神の知性の意向を読みとろうとしたり、実証主義が進歩や進化という概念で歴史をすべて理解しようとしたことが、その例証である。そして、クローチエは、史的唯物論がヘーゲルの遍在的観念を遍在的物質でもってとり換えて、事物の諸要素を一元的な概念に還元するものと看取した。史的唯物論は、歴史の原理を経済的事実に求める。だが、かれにとつて、経済的事実が人間の社会生活に決定的な規定性をもつとは考えられなかった。こうして、歴史の流れを単一の概念に還元しようとする歴史哲学は、その抽象化の過程で、具体的な歴史の流れを破壊して無にするとして、歴史における具体的諸事実を一つの概念に還元することが拒絶される。⁽⁸⁾「歴史は非常に複雑でデリケートなものであり、絶えざる疑い、もつとも注意深い検討や再検証および忍耐を必要とする。歴史は乱暴にとり扱われることに堪えない。そこではかつてマキアヴェリが述べたように個別的に記述されたことにのみ価値があるのだ」と。⁽⁹⁾こうして、クローチエは「史的唯物論は歴史哲学ではない」と論ずる。その論理は、歴史哲学の可能性を認めた上で、史的唯物論がそれに該当するかを検討するのではなく、抽象化や概念化の作業を有害なものとして断じ、歴史哲学そのものの可能性を否定することによって、「史的唯物論は歴史哲学ではない」との結論に達するものである。

史的唯物論が歴史哲学ではないとするならば、それは一体何か。科学理論でないとするならば、当然それは資料であるということに帰結する。「史的唯物論は、新しい歴史哲学や新しい方法ではなく、歴史

家の知識の中に入ってくる新しい資料、新しい経験の総体である。」⁽¹⁰⁾「歴史叙述に関して、史的唯物論は、歴史理解の新しい助けとして、それによってなされた観察に留意するようにとの警告」⁽¹¹⁾なのである。史的唯物論は、資料や経験の総体とされ、科学理論としての性格および価値を奪われてしまった。史的唯物論の中に、「厳密な意味で、とりに上げるべき理論を探究する必要はない。その中には、いわゆる理論は全くない」のだと。しかしながら、科学理論としての価値が否定されたとしても、「資料」・「経験」としての価値は評価されねばならない。なぜなら、「観念や経験を豊かにすることは、歴史叙述の発展の条件」⁽¹³⁾となるからである。

この見解は、翌一八九七年に発表された「マルクス主義の若干の概念の解釈と批判のために」(*Per la interpretazione e la critica di alcuni concetti del marxismo*)という論文において、つぎのように再把握されている。史的唯物論は「単なる歴史解釈の一規範」⁽¹⁴⁾であり、しかも「経験的規範」である。この規範は、「社会のなりたちや変遷をよりよく理解するために、社会のいわゆる経済的基礎に注意を向けるよう勧める」⁽¹⁵⁾それゆえ、「単なる規範であるが、ともあれ、まことに示唆に富んだ規範」⁽¹⁶⁾なのである。こうして、史的唯物論は、歴史解釈の一規範としての価値が付与される。しかし、それは普遍的に妥当する規範ではない。「ある場合には役立ち、他の場合には役に立たない道具」⁽¹⁷⁾に例えられるように、あくまで多くの規範のうちの一つにすぎないのである。それでは、この規範は、いかなる場合に妥当性をもつのであろうか。それは、「実際の歴史叙述において」あるいは、「先行諸学説では解決されず、もしくは不十分な方法で解決されてい

る歴史の諸問題を解くことを試みることに依りて、立証されねばならないのである⁽¹⁸⁾。換言すれば、クローチェは個々の場合に判断するべきものとして、この問題を片づけてしまったのである。

史的唯物論は、まず、「新しい資料、新しい経験の総体」と定義され、ついで、「歴史解釈の一規範」と再定義された。これは、クローチェが歴史と歴史叙述の問題を考察する過程で、歴史叙述の活動に一定の規範が必要なることを認めたとの理解されよう。かれにとりて、「個別的に記述されたことにのみ価値がある」としても、全くならぬ規範も必要でない」と論ずることは、歴史叙述を「事実が語り、歴史家がその声を聴いて記録する」という単純な客観性信仰の次元にまで逆もどりをさせることになるからである。

- (1) B. Croce, *Come, in Materialismo*, p. 279.
- (2) B. Croce, *ibid.*, p. 282. なお、クローチェのマルクス主義研究について論じている我国の研究として、北原敦、『クローチェの政治思想(上)』——自由主義とファシズム——、『思想』、第五三五号、一九六九年、四二—五九頁。および同、『自由主義とファシズム——クローチェの政治思想(下)——』、『思想』、第五五三号、一九七〇年、六五—九一頁がある。この北原論文は表題が示す通りマルクス主義研究のみをとり扱ったものではないが、とくに(上)編はクローチェ思想の体系の中で、マルクス主義を位置づけよう。
- (3) B. Croce, *ibid.*, p. 279.
- (4) この論文は、一九〇〇年に『*Sulla forma scientifica del marxismo storico*』と改題され、また、本文も修正の上、『*Materialismo*』に収められた。
- (5) H. S. Hughes, *op. cit.*, p. 78. 生松・荒川訳、前掲書、五一頁。

クローチェの史的唯物論解釈(中川)

- (9) B. Croce, *Sulla forma scientifica del materialismo storico* (以下 *Forma* と略記) in *Materialismo*, p. 12.
- (7) B. Croce, *ibid.*, p. 7. クローチェにとりて、社会的プロセスは一連の諸勢力によつてなり立つものであるが、一つの力だけが優位してゐる社会は考え難い。それゆゑ、マルクス主義は、必然的に抽象的・単一的思考のゆゑに成るべきである。F. Colucci, *I fondamenti della crociana teoria dell'errore e i problemi del marxismo negli anni 1895-1900*, in 『*Rivista di Studi Crociani*』, a XV, fasc. III-IV, 1978, p. 277.
- (8) G. L. Casanovi, *Materialismo storico e storiografia in Croce negli anni 1896-1897*, in 『*Archivio Storico Italiano*』, a 135, fasc. 1-2, 1977, p. 16.
- (6) B. Croce, *Le teorie storiche del prof. Loria*, (以下 *Loria* と略記) in *Materialismo*, p. 39.
- (10) B. Croce, *Forma*, in *Materialismo*, p. 10.
- (11) B. Croce, *ibid.*, p. 15.
- (12) B. Croce, *ibid.*, p. 13.
- (13) B. Croce, *ibid.*, p. 10.
- (14) B. Croce, *Per la interpretazione e la critica di alcuni concetti del marxismo*. (以下 *Interpretazione* と略記) in *Materialismo*, p. 80.
- (15) B. Croce, *ibid.*
- (16) B. Croce, *ibid.*, p. 81.
- (17) B. Croce, *ibid.*, p. 80.
- (18) B. Croce, *Loria*, in *Materialismo*, p. 38.

四、マルクス経済学とクローチェ

クローチェは、史的唯物論を論ずるうちに、マルクス経済学の研究

に立ち入ることになった。彼は、「マルクス主義の若干の概念の解釈と批判のために」においてマルクス経済学とそれに関連する諸問題とを扱っている。マルクス経済学の研究は、その原典である資本論の内容についての検討となる。資本論におけるマルクス研究はいかなるものであったか。第一に、形式において、それは一九世紀前半のイギリス社会をその分析の対象としているとはいえず、多分に理念化された社会の研究である。その社会は、歴史的に存在する社会ではなく、ある一定の仮説によって推論された観念的で図式的な社会であるから、現実の事実として現われるものではない。それゆえ、マルクスの研究は、仮説的で抽象的な理論研究であるとされる。⁽¹⁾ つぎに、資本論が研究の対象としている範囲については、経済的諸事実の全分野を包括するものではないし、すべての経済的事実がそこにつながっている決定的かつ支配的な領域さえ含んでいない。その範囲は、一つの特別な経済社会すなわち資本の私的所有をもなった「資本主義的」な社会において生じうる事実に限られているのである。したがって、一般にかつ普遍的な経済活動および理論的に発生しうる経済的事実は、その対象外として除外されている。それゆえ、資本論は、一般経済学ではなく、資本主義社会の諸法則に関する経済専門論文となっている。⁽²⁾

このように、クローチエは、マルクス経済学を歴史的研究ではなく、妥当領域の狭い特殊な研究であるとして、一般経済学と区別した。これは、あらゆる場合としてあらゆる社会に適合する一般経済学を求めたのであるが、超歴史のかつ超社会的なこの経済学は、一体いかなる役割をはたしうるものであろうか。さらに、一般経済学そのものが存在しうるものであるか、あるいは、一般経済関係ともいわれるべきも

のの法則化が可能であるか。これらの問題が、逆に検討されねばならない。だが、クローチエは、この段階で、それらの問題に答えていない。同様な事柄を、かれがマルクス経済学の価値理論を検討している際にも、指摘することができる。価値の概念は、経済学の基礎に置かれるべき「第一の経済的事実」として法則化される。マルクスの資本論において、価値―労働の理論すなわち労働価値説は、基礎的理論である。クローチエは、この理論が普遍的妥当性を有するものかを問う。かれによれば、労働価値説はあらゆる社会に妥当する理論ではない。それは論理的な一般性をもつものではなく、特定の経済社会においてのみ妥当する。この理論は、労働によって増加しない富、階級差を富の配分方法などの諸要素と除外して、抽象化されたのちに最後に残った経済社会においてのみ妥当する。⁽³⁾ この理論はそもそもこのような社会をモデルに成立したのである。資本主義社会において、価値と労働の等式は部分的にしかなり立たず、「多くの諸事実のうちの一事実」として理解されるのみである。こうして、労働価値説は価値の一般理論ではないとの結論が引きだされる。マルクス経済学は、一般経済学ではなく、経済社会学ないしは社会における労働の諸条件についての比較社会学的経済学であり、労働価値説はその基礎的理論として、いわゆる資本主義社会の分析において一定の有効性をもちうるのである。こうして、マルクスの理論は、一般的格言(アフォリズム)と特殊の適用例を残すのみだと主張されたのであった。⁽⁴⁾

価値論に関して、クローチエは、純粋経済学をかれのもっとも妥当だと考える経済理論だとして、オーストリア学派とりわけパレート(Vilfredo Pareto)の理論から、有用性の概念を採用した。⁽⁵⁾ この概念こ

そ、人間の経済的本性にもっともよく適合しようと、かれは考えたのである。クローチェにおいて、有用性の概念は単に経済的な概念にとどまらない。マルクス主義の妥当性の問題は、理論的側面でのみならず、実践的側面でも検討されている。実践的側面を考慮するならば、「史的唯物論は、歴史生活の諸要因を探究する目的によってではなく、特定の社会のなり立ちを説明する必要から生まれてきた」⁽⁸⁾のである。それは学者によってではなく、「政治家や革命家」によって作りだされた。マルクスについていえば、哲学者あるいは科学者としてではなく、革命家としてのかれの活動が考察の対象となる。「マルクスは、政治を知ろうとしたのではなく、それを変革しようとしたのである」⁽⁹⁾。そして、かれは、具体的事実すなわち現実の社会はどのようなものであるかを教えた天才的政治家、リアリズムの師であった⁽¹⁰⁾。

クローチェは、当初、史的唯物論と社会主義との関係を論ずる中で、道徳は社会主義に必要な前提であると考えていた⁽¹¹⁾。だが、科学と実践的プログラムとの関係については、後者を前者から演繹することは不可能であるとして、後者を「経済的観察や実践的信念の分野」⁽¹²⁾で判断しなくてはならないと論じている。科学と実践とが切り離されることとなったのであるが、実践的プログラムが理論の裏付けを欠いて、経験や信念によってのみ判断されることには、大いなる疑問をいだかざるをえない。ともあれ、ここで実践の問題は道徳のそれと、すなわち政治と道徳とは切り離され、明確に区別されたのである。政治と道徳とは別個の領域であり、手段は手段ゆえに、道徳的あるいは非道徳的との区別をしない。単に目的に適合しているか否かの判断がなされるのみである。道徳的あるいは非道徳的の区別は、目的にのみ存する⁽¹³⁾。

クローチェの史的唯物論解釈(中川)

マルクス主義に対して投げかけられた非道徳性あるいは反倫理性との批判は、この観点から拒否される。クローチェによれば、マルクス主義は、道徳の無力さを教え、「政治の概念において、力、闘争、権力の原理をはっきりと確認し、……私をイタリア政治学の最良の伝統につれもどした」⁽¹⁴⁾。それゆえ、マルクスには、「プロレタリアートのマキアヴェリ」⁽¹⁵⁾の名が与えられる。こうして、実践あるいは政治の領域から道徳が排除されたのちに、それに代るものとして、実践や政治行動の判断基準となるものは、有用性の概念であった。

- (1) B. Croce, *Interpretazione*, in *Materialismo*, p. 58.
- (2) B. Croce, *ibid.*, p. 59.
- (3) C. Vigna, *op. cit.*, pp. 103-104.
- (4) B. Croce, *Interpretazione*, in *Materialismo*, p. 111.
- (5) M. Corsi, *Le origini del pensiero di Benedetto Croce*, Napoli, 1974, p. 150. B. Croce, *Forma*, in *Materialismo*, p. 28.
- (6) B. Croce, *Interpretazione*, in *Materialismo*, p. 78.
- (7) M. Bazzoli, *Fonti del pensiero politico di Benedetto Croce*, Milano, 1971, p. 41.
- (8) B. Croce, *Forma*, in *Materialismo*, p. 14.
- (9) B. Croce, *Come*, in *Materialismo*, p. 312.
- (10) M. Bazzoli, *op. cit.*, p. 41.
- (11) B. Croce, *Forma*, in *Materialismo*, p. 20.
- (12) B. Croce, *Interpretazione*, in *Materialismo*, p. 112.
- (13) S. Onufrio, *La politica nel pensiero di Benedetto Croce*, Milano, 1962, p. 22.
- (14) B. Croce, *Prefazione della 3a edizione in Materialismo*, p. XIII.
- (15) B. Croce, *Interpretazione*, in *Materialismo*, p. 113.

五、おわりに

クローチエによるマルクス主義理論の考察は、その理論をより明確な形で解釈しようとする試みであったが、他方、それは批判的修正のそれでもあった。後者の試みは、当時の修正主義の波に乗って、イタリアにおける社会主義の死を予言させるまでになったのであった。サントレリが指摘しているように、クローチエの批判は、イタリアの社会主義者たちにマルクス主義の科学的内容への信頼を失なわせ、マルクス主義陣営内にも多くの賛同者をみいだしたのであった。そしてまた、『史的唯物論とマルクス経済学』第一版の序文に述べられているように、「マルクスの思想の健全で現実的な核心を、かれ自身の形而上学的・文学的粉飾から、そして、その学派の軽率な注釈や推論から解放することに成功した」⁽²⁾ものと思われた。

かれは、「マルクス主義の若干の概念の解釈と批判のために」の終章で、その論文においてめざしたことを結論としてまとめ呈示している。⁽³⁾すなわち、経済学については、マルクス経済学を一般経済学ではなく、比較社会学的経済学として位置づけること。歴史理論においては、史的唯物論をヘーゲルの伝統や俗流進化論などあらゆる先験的概念から解放して、歴史解釈の規範として捉え直すこと。実践に関しては、マルクス主義の社会的プログラムを純粹経済学の諸原理から演繹することが不可能であることを示し、その判断を経済的観察や実践的説明の分野でおこなうこと。そして、倫理的側面では、マルクス主義の非道德性あるいは反倫理性を否定すること。これらについては、本論ですでにふれたので重複を避けるが、そのいずれの点でも、当時の

状況の下で理論的に一定の成功をおさめたといつてよい。それは、知的世界におけるかれの成功を支えたものである。

だが、これらの成功にもかかわらず、われわれは本稿の考察の対象となった時期のクローチエの論理に内在する不明確さととまどわざるをえない。とりわけ、概念化・抽象化に対して著しい嫌悪を示しながらも、普遍性を要求する点について、とくにその感が強い。もちろん、これらの点は、のちに、彼が精神の哲学を体系化し、さらに歴史を自由の歴史と把握してより大きな成果をおさめる過程で、かれなりの解決がはかられることとなる。その点の論究については、別の機会を待ちたい。

(1) E. Santarelli, *op. cit.*, pp. 70-71.

(2) B. Croce, *Prefazione della 1ª edizione*, in *Materialismo*, p. VIII.

(3) B. Croce, *Interpretazione*, in *Materialismo*, pp. 111-112.